

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19401011

研究課題名 (和文) 熱帯林再生援助事業の持続と村落組織に関する研究-フィリピンを事例に

研究課題名 (英文) Study on the state of ODA supported reforestation projects and its relation with management of local organizations in the Philippines

研究代表者 葉山 アツコ (HAYAMA ATSUKO)  
久留米大学・経済学部・准教授  
研究者番号：30421324

研究代表者の専門分野：地域研究

科研費の分科・細目：人文学 A・地域研究

キーワード：森林、組織、開発、援助、フィリピン、土地利用

## 1. 研究計画の概要

### (1) 目的

フィリピンでは数多くの森林再生援助事業が実施されてきたにもかかわらず、多くの事業は持続的な森林再生にはつながっていない。その原因として、外部組織によってつくられた森林再生・管理のための開発組織が地域社会に根付かないことにあると考えた。それはその地域社会に開発組織を根付かせるための仕組みが存在していないことに起因し、他方、そのような仕組みが存在する地域社会では援助事業終了後における持続的な森林再生・管理が見られるとの仮説をたてた。この仮説を検証するとともに、この仮説に基づいて地域社会に開発組織を根付かせるための仕組みが何であるかを考察することが本研究の目的である。

### (2) 調査対象地

仮説検証のために以下の 3 つの山村でフィールドワークを行う。それらは、①ミンダナオ島北ダバオ州ニューコレリア町エル・サルバドル村、②ミンダナオ島ブキドノン州バレンシア市コンセプション村、③パナイ島イロイロ州マアシン町ボロ村である。3 村ともに村の全域が国有林地内に含まれ、1990 年代に海外援助機関による植林事業の対象地になった村である。植林事業に関連して森林管理のための住民組織がつくられた。それぞれの住民組織の現状は、①の山村では機能不全に陥ったが、②と③の山村では管理機能が継続している。①と②の山村のフィールド調査はわたしが、③の山村でのフィールドワーク調査はアテネオ・デ・マニラ大学の永井博子氏が担当する。

## 2. 研究の進捗状況

### (1) 研究方法

主たる調査項目は、①世帯員の経済水準と土地利用との関係を明らかにするために全世帯を対象にして世帯所得源調査と土地利用調査、②世帯間の関係性を明らかにするために全世帯員を対象にした親戚、姻戚調査、③森林管理のためにつくられた開発組織と既存の組織—具体的には、(a)行政組織、(b)外部によってつくられた外生組織、(c)住民が自発的につくった自生組織—との重なりを明らかにするための組織調査 (ルール、構成員など) である。これら定量的調査に加えて、何人かの代表的な村民のライフストーリーの聞き取り (質的調査) もおこなう。

### (2) ミンダナオ島北ダバオ州の山村

#### ①森林組合機能不全化の原因

植林地が村の面積の約半分を占めていたにも関わらず、2003 年より開始された伐採によって現在ではほとんどの植林木が消失している。森林組合 (住民組織) が機能不全に陥った原因は、直接的には木材市場からの強い伐採圧を森林組合が制御できなかったことにあるが、その背景に年間許容伐採量を遵守することよりも植林木を現金化したい住民の経済合理的行動と禁伐下であっても伐採を許可し賄賂を受け取る行政のレントシーキングの存在が明らかになった。これは、仮説として立てた開発組織を根付かせるための仕組みとしての経済的要因と行政の関わりを考察するための示唆を与える。

#### ②森林遷移による植生回復

上記のように植林木がほとんど伐採され

たにも関わらず、村全体の植生回復は遷移によって進行している。過去約 15 年間の村人口の推移をみると、わずかに増加しているにすぎず、人口による土地利用圧は大きくない。また多くの住民は自身の治安確保のために村の中心部に家屋を移している。多くの土地利用が放棄された結果として植生の遷移が始まった。このように治安問題はフィリピンの山地における特徴の一つであり、土地利用を規定する要因であると言える。治安問題は、村落組織の存立基盤に影響を及ぼすために、仮説として立てた開発組織を根付かせるための仕組みとして考察すべき要因であることが明らかになった。

### 3. 現在までの達成度

#### ④遅れている

(理由)

当初の予定では、初年度と 2 年度で①のミンダナオ島北ダバオ州の山村のフィールド調査を終え、2 年度と 3 年度で②のミンダナオ島ブキドノン州の山村でのフィールド調査を終える予定であったが、②の調査開始が 3 年度になってしまったため最終年である今年度もフィールド調査を継続する必要がある。遅れた理由は、①のフィールド調査における調査項目に試行錯誤があったため、調査に予定以上の時間がかかったことと①と比較するための適切な調査山村を選ぶまでに時間がかかったためである。

③のパナイ島イロイロ州の山村の調査を担当しているアテネオ・デ・マニラ大学の永井博子氏は、すでに定量的調査を終え、今年度は質的調査としてのライフヒストリーの聞き取り調査を行うことになっている。予定よりやや遅れているものの大きな問題ではない。

### 4. 今後の研究の推進方策

#### (1) フィールド調査

当初予定から 1 年間ほど遅れている②のミンダナオ島ブキドノン州の山村でのフィールド調査は、初年度より調査を一緒におこなっているフィリピン人協力者 2 名が 5 月より継続し、わたしが調査に加わる 8 月には終了する予定である。永井氏の③のパナイ島イロイロ州のフィールド調査も 8 月までには終える予定になっている。9 月より②と③の山村のデータ分析と 3 村の比較ができると考えている。予定より進行が遅れてはいるが、研究計画を変更する必要はないと考えている。

#### (2) 研究成果発表

今年度は、現在準備中である①のミンダナオ島北ダバオ州の山村での成果を学術誌に投稿する予定である。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計 2 件)

- ① 葉山アツコ、政府主導の森林再生に対する住民の反応-フィリピン・アップランド村落の現場から、古今書院、草野孝久編、村落開発と環境保全 住民の目線で考える、2008 年、200 頁(135-150)
- ② 葉山アツコ、フィリピンにおけるコミュニティ森林管理-自治による公共空間の創造につながるのか、人文書院、市川昌広・生方史数・内藤大輔編、熱帯アジアの人々と森林管理制度-現場からのガバナンス論、2010 年、278 頁(87-108)